



7. 26励ます集い 朗読劇 第3場面 「子供たちからの手紙」

7月26日、日比谷公会堂。JAL原告団を「励ます集い」で原告団による朗読劇が披露されました。多くの参加者から「子供たちからの手紙の場面で大変感動した」との感想を頂きました。朗読劇で読み上げられた「子供たちからの手紙」を以下に紹介します。

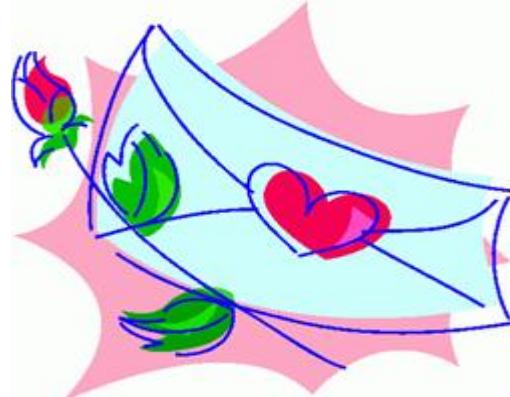
娘さんからお母さんへ

お母さんへ

お母さんがJALを解雇になってから、本当にいろいろ大変そうで、妹や、私は不安だったけれど、いつも全力で仲間の人たちと、会社を相手に闘っているお母さんの姿を見て、私も頑張ろうという気持ちが生まれました。

中学3年の時に、ノースウエスト航空の客室乗務員の人たちの裁判に連れて行ってもらい、学校で作文を書いたことを覚えているけれど、まさか今はお母さんが裁判を起こす立場になるとは考えてもいませんでした。私や妹に、あまりかかわっている時間もなく、会話する機会があまりないのは、時々さびしく感じますが、それよりもお母さんを応援する気持ちの方が強いです。

今のお母さんの会社と闘う姿を見ていて、私も将来自分が心から誇りを持って働けるような職業を見つけたいな、と強く思っています。妹と私、そして、お父さんも口に出さないけど、いつまでもお母さんの味方ということを忘れないでください。家族みんなで、これからも応援してサポートするので、頑張ってください。



娘より



息子さんからお父さんへ

父へ……

僕たち家族のために別の会社で働くを得なくなったあなたに代わり、あの日、大学生の僕は東京地裁の法廷にいました。一点の疑いもなく、僕は勝利判決を信じていました。「整理理解雇を無効とする」という、裁判長の言葉を聞いたらすぐに法廷を抜け出して、一刻も早く携帯メールで知らせようときめていました。

結果は会社主張を丸呑みにした、不当判決でした。「棄却」という言葉を聞いたとき、あまりの悔しさに涙がにじみ、僕はただ裁判長をにらみ続けていました。

その判決をどう伝えたらいいのか、落胆したあなたの姿が浮かんてきて、どうしてもメールを打つことが出来ませんでした。これから先、裁判は何年かかるだろうか、このまま大学を続けていいのだろうか、と一人悩む日々が続き、将来の夢が碎けそうになりました。

家族で話し合ったとき、「家族に希望があるとすれば、それは裁判で勝利するしかない」とあなたは言いましたが、その言葉は、家族全員の一致した気持ちです。今度の「整理理解雇撤回」の闘いで、多くの貴重なことを学びました。勝利するまで僕もあなたと一緒に闘います。大学を卒業して社会人となった暁には、僕は労働者の生活と権利を守るために頑張ろうと決意しています。……

あなたの息子より

希望退職に応じたパイロットのご家族からの手紙

先日、私の父が退職しました。乗務を外されて2ヶ月あまり、父にとっても家族にとっても先が見えず、またどうしたらいいのかわからない日々でしたが、父は退職するという決断をしました。家族としてやり切れないのは、ラストフライトもなく、会社からお疲れさまの一言もなく、半ば追い出されるように会社を去らざるを得なかつたことです。

退職届を出す前にも関わらず、父のメールボックスの荷物はすでにまとめられていて、自宅に送るばかりになっていたそうです。50才を過ぎてからの国際線乗務は体力的にも厳しかったと思いまし、英語や操縦技量など自宅で必死に勉強している姿を見てきました。

しかしながら、このような状況でやめざるを得なくなつてパイロット人生を終結したことは、父の人生まで否定された気がしてなりません。せめて最後に一言、長い間お疲れ様でした、ありがとうございました、と言われて会社を去ることができれば、どんなに報われたかと思うとやり切れません。せめて最後だけは、退職者をぞんざいに扱わず、尊厳をもったまま去っていくようにしていただければと思います。

父が退職を決意した日、父は泣きながら退職届を書いていたと、母から聞きました。この2ヶ月、私たち家族も何度泣いたかわかりません。

組合の皆様には厳しい状況が続くと思いますが、どうかお体には気を付けて、JAL再生のために頑張ってください。貴組合に父が長い間お世話になり、本当にありがとうございました。